書評

蔣寅著『大曆詩風』
上海古籍出版社、一九九二年、二六七頁

明の高棅が唱えた唐詩四分説の中唐といえば、その代表的詩人として從來概ね「元白」「韓孟」「劉柳」らをはじめとする諸大家を考えるのが常であった。しかし、この考えの雛型となった嚴羽の所説では五分説であり、中唐に相當する區分は大曆體と元和體とに分けられている。「元白」らは元和體を代表するとはいえ、大曆體を代表するものではない。後世において特質を顯現させる元和體がもっぱら中唐の代表とみなされ、一見目立たぬ大曆體の詩人像は看過される嫌いがあった。したがって、いわば中唐の前期と後期とも呼ぶべき大曆體・元和體を總體として捉えなければ、理解は十全でないばかりか正しい説明を加えることも困難となる。この認識が唐詩研究者共通のものとして近年とみにつよく意識されだしたことは、內外の研究狀況を一瞥すれば諒解されよう。たとえば『唐代詩人叢考』（傅璇琮、一九八〇）所收詩人の八割が大曆詩人であり、『盧綸詩集校注』（劉初棠、一九八九）、『錢起詩集校注』（王定璋、一九九二）、『皎然年譜』（賈晉華、一九九二）などの成果が相次いでいることは好個の例であろう。個別研究が重要であることはもとより言うまでもないが、大曆體の理解にはそれだけでは充分ではない。元和體と異なり、どちらかといえばその特質を內在させ、しかも大小の群像が錯雜するからだ。しかし、大曆體の總體的把握はこれを彼此に缺く憾みがあった。その渴を癒すべく著わされたのが本書である。本書で提起された問題や視座および研究方法は、向後ただ中唐詩のみならず、唐詩研究上も大いに裨益する所があり、本書の成果を無視して歩を進めることができないと考える。

本書の體裁は、本論が九章からなり、末尾に附錄として「大曆詩人名錄及作品數量」「大曆詩研究參考文獻一覽」「徵引書目」を載せ、大曆體詩に關する基礎資料を提供す

る。とくに文獻一覽は幅廣く目が通され、中國における現況を跡づけるに貴重で、日本での研究成果も本論で開陳される以外にかなり吸收されていることが判る。中國における研究方法上の日本中國學の存在にかねてより疑念を抱いていたので、その意味で驚きまた新鮮な心地がしたのも事實である。

本論の第一章から第四章まで、すなわち「從『河嶽英靈集』到『中興閒氣集』——由唐人選唐詩所作的抽樣分析」(第一章)、「氣骨頓衰——時代精神的變遷」(第二章)、「時代的偶像——大曆詩風與謝朓」(第三章)、「主題的取向」(第四章)は、いわば外部徵證ともいうべき客觀狀況から、大曆詩の文學史的位置と特質とを考察する。とりわけ第四章はさらに六つの主題ごとに詳述され、ここで抽出された大曆詩の特質が後半の第五章から第八章まで、すなわち「時閒與空閒」(第五章)、「感受與表現」(第六章)、「意象與結構」(第七章)、「體式與語言」(第八章)などのいわば內部徵證ともいうべき詩人の內面世界と文學との關りを究明する際の重要かつ基礎的な視點となっている。第九章「大曆詩風的內涵及大曆詩的地位」は、文學史的影響關係と大曆詩の評價に及ぶ敍述である。

第一章では選集編者の目を通し、盛唐詩から大曆詩への變遷を探る。『河嶽英靈集』より窺うことのできる氣風は、自由で昂揚した時代精神、內容と表現技巧が調和した均整美、「奇」により評價される藝術的獨創性が指摘される。殷璠のいう「風骨」は漢魏のそれではなく、建安の才情と任氣をうけつぎ、自己の意識によって萬事が達成できると考える剛建な風格と自負であったとみなす點は、盛唐詩を考える上で示唆的であろう。一方、大曆の詩風を物語る『中興閒氣集』からは以下の諸點が特筆される。盛唐詩の特徵である「風骨」や浪漫的詩風の騷體、また內容と表現の調和が醸し出す「遠韻」が姿を消し、元結によって否定された齊梁詩の「形似」や婉麗が逆に評價を受けた等である。雄渾で想像力にとむ盛唐詩から、寫實的かつ現實的で纖細な大曆詩への變貌を跡づけする。當代の批評に基きその推移を見る著者の視點と方法は妥當であろう。著者は後半の第五章以下の展開上、大曆詩の特質を盛唐詩と比較するこ

とによって闡明する。その意味で著者の基本的な視座と方向を決定する章である。殷璠が盛唐詩にみとめた風騷兩體のうち、やがて騷體が衰頽し、したがって風體を中心とする風雅が代わって注目をあびたのかもしれぬと、留保しながらも高仲武の議論にそれをみとめている。これは元結の風雅尊重をただちに六義に求めた從來の所論と異なり注目してよい。より時代に卽した考え方といえるからだ。

第二章は、前章をうけ時代精神の變遷を、詩人の精神的位相および立場から略述する。著者は明言していないが「大曆詩風」の把捉自體嚴羽の所說に據るところ多く、盛唐詩の高い肯定的評價が前提自明としてある。むろん著者は各章で大曆詩の獨自性を評價するのだが、「盛」「衰」の對蹠的價値の大枠に比較がなされる嫌いがなくはない。何を何處で比較するかが比較論の上では肝要で、しかも比較對象の兩者に均等に行なわれるべきである（敍述の繁簡を言うのではない）。大曆詩に向けられた批判的考察が、盛唐詩に向けては往々省略されてしまうからだ。著者の顧慮された比較分析を百も承知でいうのは、評者の本書への注文の多くがここに起因すると考えるからである。

第三章は、大曆詩人の胸中に結ばれた謝朓の偶像を檢證する。李白が「淸發」とみとめ、また「淸麗」とも目される謝朓の美意識や詩風よりは、著者はその處世觀を重視する。つまり、政治社會における出世願望と隱逸への欲求が衝突矛盾せず、觀念と實生活を調和させる方法として半官半隱の「吏隱」を謝朓にみとめるのである。この他に謝朓の主な文學的傾向として「友情」と「鄕愁」を擧げ、山水詩とともに大曆詩との類似を指摘し、思想感情および生活態度の類型を見出している。この章は本書においてきわめて重要な位置を占め、論理構築の上で第四章の「隱逸的旋律」「自然的新發現」の前提となっている。ここでなされた問題提起の意義と評者が考える問題の所在とは後にふれるとして、一言しておきたいのは、しばしば論及されしかも術語として重要な「吏隱」の定義が判然としないことだ。著者は各章において、じつに精緻な檢討および考證を盛唐詩との比較上している。だが處世觀については初盛唐期から大曆期にかけての考察がなく、「吏隱」がきわめて突出し

た形で示される。著者が據證する大曆期の「吏隱」の例が、初盛唐期の用例といかような差異を呈するのか。また、大曆詩人自身の「吏隱」にみとめた意味を今少し嚴密に定義して欲しかった。唐代の處世觀の推移の中で提出されるとさらに說得力を增したと考える。同時に、謝朓像全體としての評價が盛唐詩といかに異なるかも、やはり言及して欲しかった點である。

第四章は、大曆詩人の主題の傾向を分析し、その獨自性を明らかにする。唐詩における各種の主題は盛唐詩にほぼ盡き、藝術的成果も高い水準にあるといえよう。大曆詩の主題は比較的限られたものに集中する。まず時代精神の背景として「迷惘和反思」が擧げられ、傳統的主題ではあるが大曆期に獨自の展開をしたものとして「衰老的感嘆」「孤獨與友情」「鄉愁羈恨」、そして新たな展開を見せるものとして「隱逸的旋律」「自然的新發現」を分析の對象としている。

衰老にせよ、孤獨・鄉愁旅愁にせよ、人生の陰翳こい部分にとりわけ關心をもち、好んで歌おうとする傾向は大曆詩の特色であろう。ではその動機と指向性は那邊に求めたらよいのか。前者は著者の指摘するがごとく、理想や希望が失せ、なお新たな規範が示されぬ漠とした不安憂愁に起因しよう。主題の傾向からはいかなることが窺えようか。內省的とは、かく懷疑的な眼が己れの存在にも向けられることで、一つの時代が終ったという事後感終末感の自覺、朦朧の中に投げ出された感覺、歷史的共時的に連繫しえぬ焦燥などが、あるべき「個我」を求めて徘徊しているがごとくに評者には映る。これは新たな規範にむけての自我意識の徵候とみなしてよいのではないか。著者は大曆詩人の自我意識は限定され、しかも正眞なものではないというが、自他相關の中にある自我意識とは本來相對的なものではないのだろうか。

本章における論證は、作品の鑑賞分析に力點を置き、その審美眼はすぐれる。またそこから全體の論旨に敷衍させる力量も卓越したものがある。一例を引く。「鄉愁羈恨」における盛唐詩と大曆詩の感情のあり方を述べた段、孟浩然「宿建德江」と張繼「楓橋夜泊」の比較上、張詩の特徵

をいう。

同じ旅愁を詠じながら、張詩では附近の樣子が細やかにうきぼりされ、夜更けまで眠られぬ具體的表現になっている。もし前半の二句が時間的へだたりを表わすのであるならば、後半二句にも具體的な時間の流れを考えてみることができよう。卽ち、夜更けて月傾くとき、山寺の鐘聲は斷續的に響きわたり、舟中に眠られぬ旅人がそれを耳にする、という盡きぬ味わいをもつことになろう。詩人が言おうとして言葉にならぬ點、含蓄ある情緒體驗は、視覺聽覺とけあう夜景の中にかすかに波動して讀む者の胸をうつのである。こうした情緒體驗は外物を見ることより始まると、持續的な心理の過程では感情はたえず內に向う。「愁眠」の愁はものさびしい風景のせいでも、外物の中で洗練されたわけでもなく、外物に置き換えられた刺激や抑壓のもとでますます內省の度が深められていくからである。敏感にして內省的感情のあり方は大曆詩人の心理的特徵でもあり、また性格でもある。

第四章後半の二項は、新たな展開をみせた主題であり、本書の內容上核心ともいえる。著者は前章において謝朓の詩句「既歡懷祿情、復協滄州趣」に基づき、大曆詩の「吏隱」の先蹤とし、東方朔の「朝隱」白居易の「中隱」と同一視している。これは明らかに性急な論理といわねばならない。奇を衒う揶揄のための「朝隱」はまず別に考え、元和期以降の「中隱」は大曆詩の展開上把握すべきではないか。術語としての「吏隱」の檢討と定義がやや曖昧なために混同がなされているように思われる。著者のいう半官半隱とは何をいうのか。官位にあって隱逸を思う底のものであれば、すでに初盛唐期に類似の發想はあり、吏と隱の中間的立場を指すのであればやはり「若人兼吏隱、率性夷榮辱」（李嶠）「非隱非吏管尙書、一丘一壑降乘輿」（劉憲）や杜甫などの先行作があり、大曆詩との差異はみとめられないだろう。思うに、初盛唐期の「吏隱」觀は深刻な矛盾相剋を內包するものではなく似て非なるものであり、大曆期は出處進退の矛盾に窮した局面を止揚させた點にその獨自性をみとめるべきであろう。その意味で陶淵明の行藏は大

曆詩人の處世の典型とはならず、評價も概して低いとはいえ、韋應物の陶淵明觀は看過できないのではあるまいか。著者は韋詩の特色として「郡齋詩」を指摘しながら、「吏隱」の概念にゆれがあるため、その眞價が問われていない憾みがある。隱逸への欲求は著者のいうとおり絶望落膽の表裏としてあるが、あるべき處世觀の模索がたんに生活上の必要からなされたのだろうか。一方で從來の處世觀に依據できぬ思いがつよくあり、一方でそれに代わる自己を包む世界の希求があったのではあるまいか。大曆詩における處世觀の展開は、じつに重要な視座であり、著者による「吏隱」の問題提起はきわめて貴重である。なぜならば、處世觀の歷史的變遷の上では劃期的であり、詩人の世界觀や自我意識と深く關わると考えるからだ。

自然について、著者は大曆詩の山水は心中の風景であり、盛唐のそれは眼前の風景であると要約する。心象の風景であるゆえに、北方で歌われたものであっても基本的に南方での作と變わらぬと主張する。僧侶の駐錫地が安史の亂後江南へ大きく移っていることに照らして見れば、著者のいう南宗禪（とりわけ洪州禪）との關りも理解できるのであって、同時にそこには文人と緇流の交遊が獨自の氣風や詩風を醸成し易かったことも輕視できないと考える。盛唐詩が突兀とした雄大な風景を輪郭鮮やかに描き、大曆詩は卑近な自然をぼかして描くという卓見も、著者のいう心理的反映のほかに、華北と華南の風光の基本的相違に由來するのではあるまいか。變化に乏しいけれども穩やかな風景に、大曆詩人は自らの世界を見たのではないのだろうか。江南の美を南進の歷史の中で新發見した謝朓はその意味で大曆詩人の範となり、大曆詩は「形似」の傾向を帶びることになった。皎然の江南詩人にむけられた批判も、その南方に存した矜恃に向けられたものではないか。何を見るかはいかに表現するかでもある。朦朧化・曖昧化は一つの美意識のあらわれであろう。

如上の主題から大曆詩の特徵が抽出され、後半の視座となる。すなわち「衰老的感嘆」からは「平淡」の追求と意味深長な獨自の風格が、「孤獨與友情」からは時空意識の視點が、「鄉愁羈恨」からは寫實的描法の傾向が、「自然的新

發現」からは物我關係と詩人の觀照眼についてが、それぞれ指摘されている。

第五章中の「時間：歷史與現實」で、著者はいう。大曆詩人は刹那的經驗を超越して宇宙生命の律動と歷史的時間のリズムに呼應しないために、眞正な自我意識がほとんどない、と。よしたとえ限定された時間意識や對象であれ、主客相關の上に成り立つ客體の認識や觀照は、自我意識なくしてありえぬのではあるまいか。同樣なことは「主體：彼岸與此岸」で、現實を超越した理想世界の領域を擴大した盛唐詩に比べ、大曆詩は想像性に缺けて知覺に限定され、人生や世界に對し思索に乏しいという指摘にも、やはりただちに腑に落ちぬものを感じた。つまり、これらは程度の差であって質の差ではないと思う。前述した比較論上の微瑕と考えるがいかがだろう。というのも、自我意識があるからこそ意圖的に文學の變革や理論化が行なわれたろうし、想像性については著者自身次章でみとめているのだから。そして、何より「個我」意識と獨自の世界觀の存在を想定してみなければ、大曆體を包む中唐の說明は結果的にできにくいのではないだろうか。

第六章は、事物に關する感受性と表現の問題である。先秦より漢代は「感事」、魏晉以降は「感物」であると通時的に概觀し、盛唐詩人は六朝詩を斥けてきたが「感物」については六朝を踏襲し、大曆詩に至り「感事」に戻ったという視點は斬新である。また、「表現與動機」での大曆期に至り主觀と客觀が融合し、中國古典詩における基本的性格「情景交融」が現出したという指摘もきわめて貴重であろう。「情景交融的歷程」で、著者はその契機に天台宗と南宗禪の影響を擧げる。そして大曆詩には作詩動機に隨機性や偶然性が消滅し、「取境」の要求がおこったという。はたしてそうだろうか。「意境說」にいう取境は、心を瞬時に客觀存在に觀照するのであって、固定された心を描寫するのが目的ではない。心をかくあるべしと固定し不變なものとして捉えることは、主客の差別・束縛をまねくとして禪では嚴に否定される。頓悟を主唱する南宗禪六祖慧能の言說『壇經』にも、「道須通流、何以却滯。心不住法卽流通、住卽被縛」、「念念時中、於一切法上無住、一念若住、念念

卽住、名繫縛。於一切法上念念不住、卽無縛也」とある。盛唐詩が「感物」に依りながらも興會を重視するとの主張は、恐らく嚴羽の影響であろうが、嚴羽は司空圖の言說に負う所多く、司空圖はまた自說を「王・韋」により「然直致所得、以格自奇」と標榜する以上、大曆詩における隨機性・偶然性は一概に否定できぬと思う。皎然が主唱する「天機」「神授」も、意と境のむすびつきの契機にそれをみとめているのではないか。本章の論旨は「意境說」をめぐりなされていると考えられる。著者の論證はやや婉曲であり、魏晉玄學上の言意の辨を一瞥し、六朝より元和期におよぶ言說を視野に入れ、論述の當初に「意境說」の內實を定義しておけば、「景情交融」の過程はより整然と示されただろう。また、論證の過程がもっぱら天台宗と南宗禪の佛教的言說に沿ってなされ、文人の考えた交融の經緯が文學作品によって例證されぬために、他章と比較するとやや理が勝っている感がする。

第七章では、詩人が看取した「物象」を陳植鍔が提出した「描述性意象」「比喩性意象」「象徵性意象」に、著者が「暗示性意象」を加えて分析し、具體的・個別的・靜態的・呈示的等の特質から、單純的意象である點を指摘する。その特色であるスケッチ描法は意象を新たにしたと同時に、本來的に詩境が淺薄で含蓄もないため、象徵的意象が相補的に發達したとみなす觀點は傾聽に價しよう。しかし、たとえば、「意象的性狀」で著者が引く「一葉落」の表現を、日月の推移の所感を一葉に集中してみとめ、きわめて具體的であるとみなす例は、もはや象徵的といいうるのではないか。前章の「移情・烘托・象徵」で指摘される象徵の常套化傾向と考え併せると、具體的敍述とされる表現が、すでに象徵的な意象になっているのも少なくないのではあるまいか。分析的であるというのは同時に細分化を意味し、意象のもつ多義多樣性が具體性を强調するあまり捨象されがちであるのも留意すべきであろう。ついで意象の靜態性が指摘される。その中で著者は靑と白の色彩對を大曆詩人の特色としている。しかし、この好尙は盛唐詩にも廣く見ることができ、大曆詩の特質といえぬと考えるがどうだろう。またそれが「就很容易造成靜態的外觀呈示的效果」と

いうはたらきを有するかも、文學における色彩の位相が著者がいうほど直截的であるかとともに、吟味を要するように思う。靜態性の特色として「時閒意象的空閒化」では、「處」「時」字の並用が擧例される。特定の時刻のもとに空閒形象をあらわし、動作性のつよい行爲を分解し靜止畫面で示すだけでなく、持續性に着目して特定の場に限定しかつ具體的に示そうとする旨論證する。これは次項「意象結構與表述結構」で分析される意象閒構成における大曆詩の特徵「平列式」が、局部の表現に腐心し均整美を忽せにする點の指摘とともに、後世的展開を考察する上で有意義な概括であろう。

第八章「體式與語言」は、第一章で概評される形式面での特質を、前章で考察された主題・構成・表現から論述する。大曆詩にとってふさわしい樣式が五律であったことの他に、古詩も律化の傾向にあるなど注意してよい指摘だろう。なかで著者はスケッチ描法の長所を擧げるが、いかに描くかは典故をいかに按排するかと同樣で、假托や比喩がないというだけでなく「淸空」や「淡淨」の氣風がいかに形成されたかを探る必要があろう。前項で言及される意象の「虛化」と相俟って大曆詩人の美意識を考える上で缺かせぬ論點だからである。「語言的風格特徵」では、さながら雄壯な建築物のごとき盛唐詩を前にして、大曆詩は門窓牆籬の細部に雕琢を凝らそうとしたと前置きし、その特徵を三點擧げる。淸新な風格の希求、語句の雕琢による表現力の增大、「平易流利」の傾向などである。本章中何氣なく示される五律において領聯に流水對を布置したり「不對」であるのは中晩唐の趨勢であるとの言及、また連綿詞の單用についての評價などは、著者の該博な知見と鋭敏な鑑賞眼を如實にものがたっている。

國威あがり版圖擴張の一方であった開元天寶期、盛唐詩は時代の風潮をうけ萬般に外向的かつ高揚の氣風をもつとすれば、危殆に瀕した亂後の詩人らが內向的かつ消沈した風潮に傾いても無理はない。いわば時代は「擴散」から「收斂」へと移ってゆく。擴散の盛唐詩が評價をうけると同樣に、收斂の大曆詩の獨自性が究明され評價されなければな

らぬこと論を俟たない。本書はその意圖のもと大曆體の總體的把握が試みられる。總論は、精緻な分析と理論に基づく各論に支えられ、各論は豐富な知識と周到な基礎研究によって裏づけられる。作品に向けられたすぐれた鑑賞眼と理論への敷衍性は、ややもすると理に落ち易い弊を救い、隨所に見せる卓拔した示唆や洞察力は著者のゆたかな見識をうかがわせる。

かくして、現實に眼を向け、己が身を省察しつつ新たな展開を模索する詩人群像が、讀む者の前に姿を現してくるのである。

（國學院大學　赤井益久）